

甲虫コレクションガイド 11

琉球大学博物館（風樹館）の甲虫コレクション

佐々木健志

〒 903-0129 中頭郡西原町千原1 琉球大学博物館（風樹館）

Beetle Collection of Ryukyu University Museum (Fujukan)

Takeshi SASAKI

はじめに

琉球大学資料館（風樹館）は、旧首里キャンパス時代に県内企業の金城キク商会から建物の寄贈を受け、動植物標本と民具類の展示を中心とした農学部付属の農業資料館（風樹館）として1967年に開館した。当時、国内の大学にはまだ附属の博物館は少なく、日本の大学博物館の草分け的な館の一つである。その後、本学の千原キャンパスへの移転に伴い、1985年に新たに全学共同教育研究施設として現在の博物館が整備され、2014年には文部科学省から博物館相当施設として認可され、館名も「資料館」から「博物館」へと変更された（図1）。

当館の標本は、おもに学内の研究者が研究活動の一環として琉球列島各地で収集したもので、現在、自然史系および文化系標本を併せて約16万点が収蔵されている。そのうち、これまでにデータベース化が完了した約5万点の標本については、当館のホームページの収蔵標本データベースで標本情報が公開されている（<http://fujukan.lib.u-ryukyu.ac.jp/>）。

コレクションの概要

琉球大学博物館（風樹館）に収蔵されている約14万点の自然系標本のうち、その約85%にあたる12万点余りが昆虫コレクションである。それらの多くは、琉球大学農学部昆虫学教室に在籍された東清二名誉教授と学生らによる採集品で、2012年に昆虫学

教室から当館へほとんどの標本が移管された。東名誉教授は、おもにサトウキビの害虫類と沖縄県内の昆虫相の解明に精力的に取り組んでこられたこともあって、県内各離島の多様な分類群の昆虫類が収集されている。また、当館には琉球大学病理昆虫クラブの学生による収集品も多く収蔵されており、1970年～1985年にかけての県内や台湾などで採集した昆虫類が含まれている。このほか、琉球大学熱帯圏生物研究センターに在籍された金城政勝元准教授が西表島で採集した約3,000点のチョウ類標本、琉球大学医学部で感染症媒介昆虫の研究をされていた宮城一郎名誉教授と當間孝子教授が琉球列島で採集した約5,000点のカ類標本などが収蔵されている。

一方、当館では学術標本の蓄積と地域標本救済の観点から、積極的に寄贈標本の受け入を行っている。これまでに、沖縄県農業試験場におられた小濱継雄氏が琉球列島で採集した約3,500点のトンボ類の標本（小濱, 2016）、元県立中学校教諭で沖縄昆虫同好会会員の長嶺邦雄氏が1960年～1980年にかけて沖縄県と東南アジアで採集した約3,000点のチョウ類標本（一部、東南アジアの甲虫類を含む）、福井市立自然史博物館学芸員の長田勝氏が1960年～1970年代にかけて本州、沖縄で採集したチョウ類と1980年～1990年代に蒐集した東南アジアのチョウ類標本（特に *Graphium* と *Delias* が充実）の



図1. 琉球大学博物館（風樹館）の外観。



図2. 標本類の収蔵状況。主に既製品のスチール製標本棚を使用。

合計約 5,000 点、琉球大学農学出身で北谷町役場におられた宮城盛善氏が沖縄県で採集した約 2,000 点のチョウ類標本などを受け入れている (図 2)。

特徴的な甲虫コレクション

(1) 楠井善久コレクション

元那覇検疫所所長の楠井善久博士によって採集された、琉球列島や小笠原諸島のコガネムシ上科を中心とした標本で、4万5,000点を超える当館最大の甲虫コレクションである。琉球列島の島々をくまなく採集されており、特にハナムグリ類は離島ごとの亜種や同一亜種内の島ごとの変異などが揃えられているほか、楠井博士が記載したカブトムシ沖縄亜種と久米島亜種のタイプ標本、シロテンハナムグリ台湾亜種が沖縄へ侵入した初期の頃の標本、沖縄県内の外来コガネムシ類の標本などが含まれている (楠井・楠井, 2014 など)。また、楠井博士は小笠原検疫所にも居られたことがあり、小笠原諸島が日本に復帰して間のない 1972 年頃の標本も含まれており、まだ観光開発やアノールトカゲの影響がほとんどない時期の小笠原諸島の甲虫相を知ることでできる貴重なコレクションである。現在、本コレクションは

楠井博士によって標本整理が進められており、データベース化を完了した標本から、随時、公開する予定である (図 3)。

(2) 松村雅史コレクション

日本甲虫学会員の松村雅史氏によって、沖縄県内に生息する甲虫類の展示用標本が寄贈されている。内容は、コガネムシ科 63 種 133 点、カミキリムシ科 152 種 251 点、タマムシ科 37 種 62 点、ハンミョウ亜科 10 種 21 点で、特に肉眼では色彩や模様などの確認が困難な小型種に関しては、松村氏自らが撮影した拡大写真が標本とともに添えられており工夫を凝らした展示標本となっている (図 4)。このほか、松村氏が発見した沖縄島のコブスジコガネ、友人から委託された沖縄県産のベニボタル、コガネムシ、ハムシなどのパラタイプ標本、またオキナワホソコバネカミキリのホロタイプ標本 (Ikeda & Matsumura, 2014) や採集例の少ないヤエヤマコクワガタなども含まれている。

(3) 野林千枝コレクション

沖縄昆虫同好会の野林千枝氏が、おもに琉球列



図3. 楠井コレクションの収蔵状況。伊豆諸島の甲虫を主とした標本。



図4. 松村コレクションの展示状況。拡大写真が添えられたタマムシ類の展示標本。



図5. シロテンハナムグリ台湾亜種とリュウキュウオオハナムグリの交雑個体の標本。



図6. 当館のタイプ標本の収蔵状況。

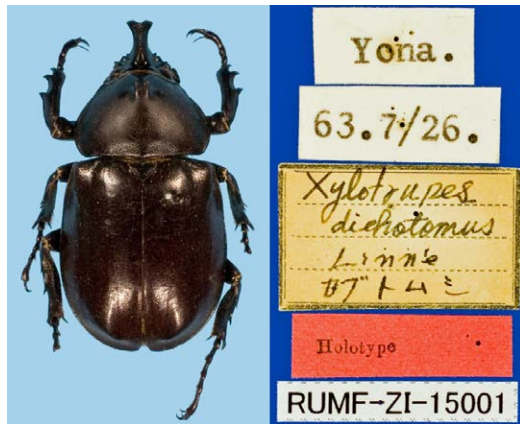


図7. カブトムシ沖縄亜種のホロタイプ標本.

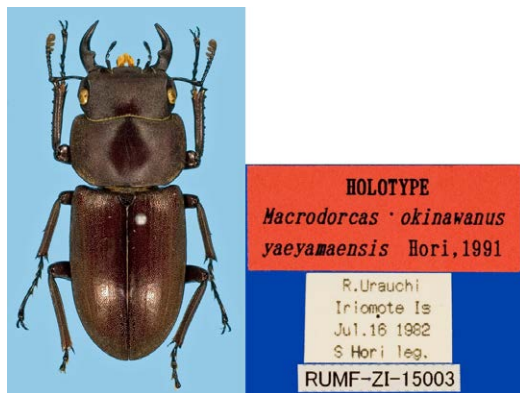


図8. ヤエヤマコクワガタのホロタイプ標本.

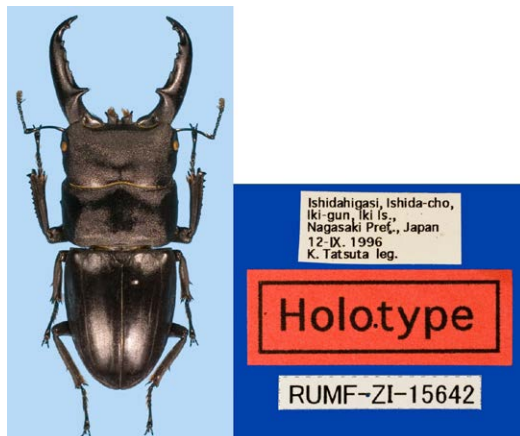


図9. イキヒラタクワガタのホロタイプ標本.

島で採集したコガネムシ科を中心とした約 1,500 点の甲虫コレクションである。特にハナムグリ類では、沖縄県内で分布が拡大しているシロテンハナムグリ台湾亜種とリュウキュウオオハナムグリとの野外交雑個体や両種の交雑実験で得られた F1 個体の色彩と交尾器の変異が確認できる標本もあ



図10. オキナワホソコバネカミキリのホロタイプ標本.

り (図5), 今後, シロテンハナムグリ台湾亜種が, 在来ハナムグリ類へ及ぼす影響を研究する上でも重要な資料となる (野林, 2013). このほか, 琉球列島に分布するオオシマアオハナムグリやリュウキュウツヤハナムグリの島嶼ごとの地理的変異を網羅した標本なども含まれている (野林, 2005).

(4) タイプ標本

現在, 当館には 521 点のタイプ標本が収蔵されているが, そのうち昆虫類は 163 点を占め, 7 目 17 科 64 種 2 亜種が含まれている (図6). その内訳は, ホロタイプが 12 個体, パラタイプが 173 個体, アロタイプが 2 個体である。以下に, 当館に収蔵されている甲虫類のホロタイプ標本のなかで, おもなものを紹介する。学名は記載時のもので表記した。

1. カブトムシ沖縄亜種 *Allomyrina dichotoma takarai* Kusui, 1976 (図7) RUMF-ZI-15001 (Holotype), ♂, 沖縄県国頭村与那, 26. VII.1963, 採集者不明.
2. ヤエヤマコクワガタ *Macrodorcas amamianus yaeyamaensis* Hori, 1991 (図8) RUMF-ZI-15003 (Holotype), ♂, 沖縄県西表島浦内川, 16. VII.1982, 堀繁久採集.
3. イキヒラタクワガタ *Dorcus titanus tatsutai* Shiokawa, 2001 (図9) RUMF-ZI-15642 (Holotype), ♂, 長崎県壱岐郡石田町石田東触, 12. IX.1996, 龍田記美雄採集.
4. オキナワホソコバネカミキリ *Necydalis tamakii* K. Ikeda et M. Matsumura, 2014 (図10) RUMF-ZI-42187 (Holotype), ♀, 沖縄県国頭村, 5. V. 2013, 玉城康高採集.

その他の甲虫標本

他の特徴的な甲虫標本としては, 当館の収蔵標本を最後に沖縄県内では採集例のないフチトリゲ



図11. ヒサマツサイカブト♀の標本. 当初はタイワンカブトムシとして収蔵されていた.

ンゴロウの標本 (1999年, 宮古島産) (佐渡山・佐々木, 2016), 与那国島を除く県内の島嶼では既に絶滅した可能性の高いガムシの標本 (1965年~1970年, 沖縄島) (佐々木, 2006), 発見例が乏しく絶滅が危惧されているヒサマツサイカブトの標本 (1967年, 南大東島産) (図11) などを収蔵している.

コレクションの整理と公開

当館の昆虫コレクション約12万点のうち, これまでに整理をほぼ完了し標本情報を公開している標本は, チョウ目が約1万4,000点, 甲虫目が約5,200点, トンボ目が約3,300点, カメムシ目が約1,400点, その他の目が2,000点の合計2万5,000点ほどしかなく, 多くの標本が未整理の状態にある. 他の自然系標本と文化系資料のデータベース化がほぼ完了したなかで, 当館の最も大きな課題の一つが, 残された10万点を超える昆虫標本の整理・同定とデータベース化である. 特に作業を困難にしているコレクションの一つが, 本学昆虫学教室が過去に実施したファウナ調査や環境アセスメント調査などで採集され, 未ソーティング状態のまま三角紙やタトウに保存されている多量の証拠標本である (図12). これらの標本の多くは, 沖縄の自然環境が開発によって大きく改変される以前の1970代から1980年代前半にかけての調査で収集されたもので, 当時の昆虫相を知る上で重要な標本であると同時に, 分類群によっては未記載種や新分布種などが含まれている可能性も高い. これらについては, まずは採集地や採集時期などの標本情報を公開し, 研究利用を促すことによって標本整理に繋げていきたいと考えている.

おわりに

他の多くの大学博物館と同様に, 当館でも予算や

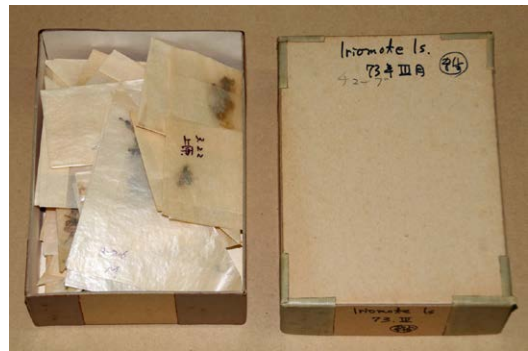


図12. 三角紙に入れられた証拠標本の保存状況.

人員の確保が年々厳しくなっており, 現在, 学芸員1名と非常勤事務補佐員1名で運営している. そのため当館では, 大学や博物館を退職された研究者や研究実績のある一般の方々に協力研究員として積極的に受け入れ, 博物館施設を研究に利用していただきながら収蔵標本の整理や同定などにも協力をお願いしている. 現在, 10名の協力研究員を受け入れているが, 興味をお持ちの方はぜひお問い合わせいただきたい. また, 沖縄昆虫同好会の月例会が当館で開催されており, 同好会の皆さんにも地域の昆虫情報の収集, 寄贈標本の受け入れ, 県版RDBの作成などに協力していただいている. 例会は毎月第3水曜日の19時から21時まで当館2階の講義室で開催しているので, 調査や採集などで来沖の際にはお気軽に参加していただければ幸いである.

謝辞

これまで当館では, 標本収集や同定, 収蔵標本目録の作成などにおいて県内外の研究者や昆虫愛好家の方々に大変お世話になってきた. 特に, 沖縄昆虫同好会の方々には, 標本類の整理や寄贈に加え, 日頃の博物館活動にも協力していただいている. 心より感謝申し上げます. また, 本稿をまとめるにあたってコレクション情報を提供して頂いた楠井善久博士, 松村雅史氏, 野林千枝氏, 長田勝氏と本稿執筆の機会を与えていただいた本誌編集委員の奥島雄一博士に厚くお礼申し上げます.

引用文献

- Ikeda K. & M. Matsumura, 2014. A new species of the genus *Necydalis* (Coleoptera, Crambycidae) from Okinawa Island, Japan. 月刊むし, (521): 32-34.
- 小濱継雄, 2016. 琉球大学博物館 (風樹館) トンボ目標本目録. 琉球大学博物館 (風樹館) 収蔵標本目録, (12), 102 pp.
- 楠井善久・楠井陽子, 2014. 沖縄に侵入した外来種のセマダラコガネの定着に関する調査1, 那覇市新都心における2013の記録. 鯨角通信, (28): 57-59.

野林千枝, 2013. シロテンハナムグリとリュウキュウオオハナムグリの交雑種の変異とその交尾器による分類. 鯉角通信, (26): 1-9.

佐渡山安常・佐々木健志, 2016. 宮古島から初めて確認されたフチトリゲンゴロウ *Cybister limbatus* (Fabricius) の記録. *Pulex*, (95): 693-694.

佐々木健志, 2016. 琉球大学博物館(風樹館)に収蔵されている沖縄県内で採集されたガムシ *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky の標本記録. *Pulex*, (95): 695-696.

(2018年5月31日受領, 2018年6月15日受理)

【短報】西表島初記録となるゴミムシダマシ科甲虫3種

筆者は西表島において, 同島初記録と思われるゴミムシダマシ科の甲虫を3種採集しているため以下に報告する. また, いくつか採集データをいただいたため, 合わせて記録する. 採集地はすべて沖縄県八重山郡竹富町(西表島)であるため省略した.

ヒラヨツモンツヤゴミムシダマシ *Diaclina nakatai* Akita & Masumoto, 2003 (図1)

1♀, 8-9. VII. 2013, テドウ山北麓, 青木淳一採集; 2exs., テドウ山, 17. V. 2017, 緒方裕大採集; 1♂, 同所, 18. VII. 2017, 筆者採集; 1ex., 大富林道, 26. X. 2017, 緒方裕大採集; 1♀, 同所, 12. IV. 2018, 筆者採集; 2♂♂2♀♀, 上原, 14. IV. 2018, 筆者採集.

本種はタイ産地である石垣島のほかに, 与那国島からも記録されている(秋田・益本, 2016; 稲畑, 2017). 筆者は, 広葉樹立ち枯れのスプレーイングおよびライトトラップによって本種を採集しているが, いずれも林縁的な環境であった. 「日本産ゴミムシダマシ大図鑑」(秋田・益本, 2016)にも記述があるように, 自然林内に多い同属のヤエヤマヨツモンツヤゴミムシダマシ *D. yaeyamaensis* とうまく棲み分けているようである.

イシガキカタモンヒメクチキムシ *Mycetochara* (*Ernocharis*) *deguchii* Akita & Masumoto, 2016 (図2) 1♂, ウーシーク森, 13-17. IV. 2018, 筆者採集.

林道沿いにて, LEDライトに飛来した個体である. 本種は1978年に石垣島の於茂登岳で採集された1♂をもとに記載されており(秋田・益本, 2016), 本報告が本種の2例目の記録となる. 上翅肩部にある一対の斑紋には変異があると思われる. 今後調査が進み, ♀を含め追加個体が得られることに期待する.

コゲチャチビホソゴミムシダマシ *Corticis* (*Tylophloeus*) *haddenii* (Pic, 1945) (図3)

6exs., 上原, 1. II. 2018, 筆者採集; 1ex., 同所, 14. IV. 2018, 筆者採集.

本種はタイ, マレー半島, ボルネオ, スマトラ, フィリピンに分布するほか, 国内においては石垣島のみから記録されている(秋田・益本, 2016). 林縁部においてトックリキワタ *Ceiba speciosa* の立ち枯れをスプレーイングしたところ, 多数のアメイロホソゴミムシダマシ *C. (T.) gentilis* およびアマミホソゴミムシダマシ *C. (Corticis) maehleri amamiensis*, その他多くの雑甲虫に混じって少数得られた.

末筆ではあるが, 種同定をはじめ様々なご教示をくださった秋田勝己氏, ならびに貴重な採集データを提供してくださった青木淳一氏, 緒方裕大氏の各氏に心より御礼申し上げます.

引用文献

秋田勝己・益本仁雄, 2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑. 304 pp. むし社, 東京.
稲畑憲昭, 2017. 与那国島からのヒラヨツモンツヤゴミムシダマシの記録. さやばねニューシリーズ, (25): 47.

(中野文尊 464-8601
名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院
生命農学研究科)

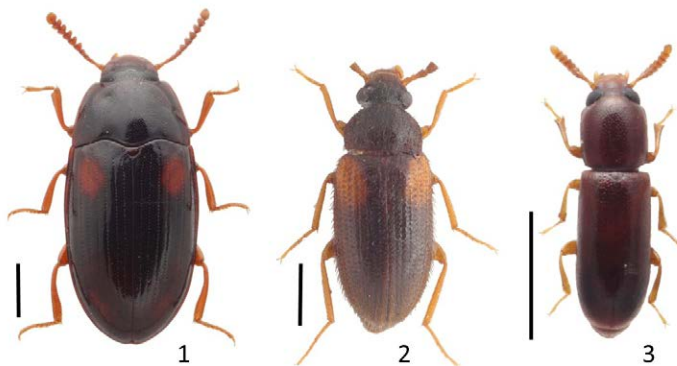


図1-3. 西表島初記録となるゴミムシダマシ3種. 1, ヒラヨツモンツヤゴミムシダマシ; 2, イシガキカタモンヒメクチキムシ; 3, コゲチャチビホソゴミムシダマシ. スケールバーは全て1.0 mm.